

2024年5月21日 Vol.223

IPO後の株価低迷局面は投資チャンス

米国ではNVIDIA、日本ではレーザーテック、東京エレクトロンといった主力半導体株に目を向けているうちに、見向きもされずにきた多くの中小型株に復活の兆しを感じておられる皆さんもお見えではないでしょうか。とりわけ中小型成長株の宝庫とも言えるIPO市場には昨年の96銘柄に続き今年も26銘柄が上場を果たして投資家の売買対象になっていますが、その多くは様々な背景によって上場後の株価低迷に見舞われている状況です。但し、Arent(5254)やABEJA(5574)などのDX、AI関連銘柄、宇宙関連のQPS研究所(5595)、楽天銀行(5838)や住信SBIネット銀行(7163)などのインターネット銀行は比較的堅調に推移。昨年12月にグロース市場に上場したZ世代向けアパレルブランドを展開するZOZOグループのyutori(5892)も3月の3分割を経て堅調に推移しており銘柄の選別色が強まってきたという状況です。

またラーメンチェーンの魅力屋(5891)や立飲み屋を展開する光フード(138A)やスーパーマーケットを全国展開するトライアルHD(141A)など投資家にわかりやすい業態の銘柄の株価は上場後比較的堅調な推移が見られます。一方では市場での認知度が低くビジネス内容が理解されにくい銘柄の株価は概ね右肩下がりの展開が見られ二極化を余儀なくされています。

そうした株価低迷の背景としては、成長期待の高さからPERなどのバリュエーションがプライム市場の平均よりも高い上に成長のために実行する先行投資によって見かけ上の業績が停滞したりすると、売り圧力が強くなること。一方で低PER銘柄には成長性がないとの烙印が押されているため、積極的にリスクテイクしようとする投資家が不在なこと。おまけに短期投資家が中心のため長期スタンスで割安感の出た銘柄に対して投資する主体が少ないといったことが考えられます。こうした局面は過去もあり、その低迷状態の株価にこそチャンスがあるとみて取り組まれた投資家には大きなリターンがもたらされたことを改めて認識しておく必要があります。短期的には下値模索が続くとしても中長期視点で運用成果を上げやすい実力銘柄がIPO後2年程度の期間の銘柄にも存在していると考えられます。但し、それを見出して投資するには一定の分析力、投資経験が必要となります。東京IPOサイトを有効活用して、そうした有望銘柄を見つけて頂きたいと思います。

その中で今回筆者は昨年から今年にかけてIPOした122銘柄をチェックしてみました。これらの銘柄は既にIPO後に少なくとも1回は決算発表しており、同時に説明会を開催するなどIR活動を活発化させております。こうした企業の決算情報を反映して今後の投資家の冷静な評価を受けて株価が上向くことになれば幸いです。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)